（模造）ダイヤモンドは輝くか？

―1890 年代の米国の原風景に見る Stephen Crane、ダイヤモンド、アフリカ（人）、移民―

増　崎　　恒

The［Fake］Diamond Sparkles?:

Socio-Cultural Discourses in the American 1890s of Stephen Crane, Diamonds, Africa（ns）, and Immigrants

Ko MASUZAKI

は　じ　め　に

小論は、（模造）ダイヤモンドが 1890 年代の米国社会に及ぼした影響力を、同時代の米文学作品を中心に据えて、当時の社会文化的状況と照合しながら考究する。1897 年 7 月、1 人の米国人が実兄に 1 通の手紙を送る。“Expect to hear from me in the Soudan. The S.A. fight is off.”、と「（アフリカの）スーダン」に加えて、「南アフリカ（で起きている戦争）」に書き手は言及する（Wertheim & Sorrentino, *Crane Log* 270）。「白いアフリカ人」（white Africans）という別名の下、アフリカ人の一派とみなされる（オランダ系の）ボーア（Boer）人と英国人が「南アフリカ」（S.A.）を舞台に武力衝突する。両者は 1897 年から翌年まで停戦する（Ward 308, 309; 岡倉 3, 65）。“The S.A. fight is off.”はこの停戦状態を指す。これは当時の米国全体がアフリカ、とりわけ（身内宛の私信特有の気安さを差し引いても）略語 S.A. で意味が通る（米国人との距離が近しい）「南アフリカ」、すなわち「英国人とボーア人の間の戦争」に向ける注目の高さの裏返しではないか。手紙は作家、兼ジャーナリスト Stephen Crane（1871-1900）によって書かれる。彼は、人間の運命を決定付ける要素として遺伝と環境を重要視する自然主義文学、米国におけるその先駆者と位置付けられる。

英語の教師と学習者に向けて、“a practical working manual for the assistance of the teacher as well as the pupil”、と謳われる英文法・英作文「指南書」（manual）が 1888 年にニューヨーク市（以下 NY 市と表記）で発刊される。英語学習に役立つ例文の 1 つとして、“The diamond sparkles.”を収録する。「ダイヤモンド」が「輝く」。これが「適切」（proper）な英語の言い回しとして、同書

が掲げる教育的な「手本」（manual）の一端を担う（Conklin iii, iv, 5　下線筆者、以下、引用中の下線は全て筆者による）。これを議論の起点にする。1890 年代の米国において（輝く）ダイヤモンドが美的外観の形容を越えて持ち得た意義、それを取り巻く言説、を考察する。Crane（の作品）とダイヤモンドをめぐる同時代の言説の相互連関を、同時期に書かれた短編“Diamonds and Diamonds”（以下、DD と表記）から探る。作品の主題、「模造ダイヤモンド」（fake）を用いる「詐欺」に光を当てる（8:118）。[注1] 先の手紙からは、ボーア人と英国人の間の戦争に帰着する（南）アフリカの今昔を注視する作家（と同時代の米国人）の姿が垣間見える。これを論議の補助線とする。[注2]

ダイヤモンドの産出地として名高い（南）アフリカ（で起きている戦争）に（ジャーナリストでもあった）作家が言及している事実、略語 S.A. に投影される彼我の距離感、を裏読みする。一戦争報道ジャーナリストの私心を超越した、時代からの強い要請への応答と見て、小論の出発点の 1 つとする。ダイヤモンドとアフリカ（人）が当時結び付く。これを前提に、Crane（の作品）と読者の背後に横たわる移民問題の本質を炙り出す。Christopher Columbus による＜アメリカ大陸発見＞ 400 周年を記念して、1893 年にシカゴで万国博覧会が開催される。同万博は米国の権勢を世界に喧伝する。同時代の社会文化的状況と無縁ではあり得ない。閉幕後、更なる国家高揚を掲げる時代が到来する。着任した新シカゴ市長は、南アフリカのダイヤモンド事業で財を築き英国領ケープ植民地首相（在 1890-96）に就任する英国人実業家 Cecil Rhodes に見立てられる（Stead 300）。Rhodes が 1890 年代の米国社会において果たし得た役割についても考察する。

小論では、Crane（の作品）に対して次の仮説を立てる。① 1890 年代の米国はアフリカ（人）を無視できない。（アフリカで産出される）ダイヤモンド（の輝き）は、社会の中核を成す中産階級米国人と新参者の移民の対立に揺れる米国、（両者の対立構造が特に顕著な）NY 市、の原風景に欠かせない一角を成す（Schlereth 17, 29）。②（南）アフリカ（人）へ向けられる作家の視線は同時代の米国の貧困階級を構成する（下層階級）移民（に起因する経済問題や犯罪）への関心の目と重なる（Mayo-Smith, *Emigration* 98）。③複数の作品に跨って登場する（英文法・英作文指南書に記載された例文を準える）ダイヤモンド（の輝き）はアフリカ（人）と移民を等号で結んだ上で安全に封じ込める戦略として作用する。これらを以下で立証する。合わせて、自然主義文学の枠外から作家を再評価・再発見するとともに、作家のアフリカ（人）－移民観を再考する手立てとする。

1. 1890 年代の米国の社会文化的状況におけるダイヤモンド、アフリカ（人）、移民、の関係性

Crane（の作品）の具体的な分析に入る前に、ダイヤモンド、アフリカ（人）、移民、の三者の関係性に着目して、1890 年代の米国が対峙せざるを得なかった社会文化状況を概観する。この時代、欧州からの移民が急増し、問題視される。彼らを特集する著作が米国の経済学者 Richmond Mayo-Smith によって 1890 年に NY 市で刊行される。移民の大半は「NY 港」を経て国内に入る。彼らの「影響力」（effect）に関する問題提起が読者に向けてなされる。また、同著作は米国を「アングロ＝サクソン人」が主導する国家とみなし、米国（人）と移民の間に自他の線を引く（Mayo-Smith, *Emigration* 4, 88；Wilkins 584）。アングロ＝サクソン人に自らを準え、（余所者の）移民を受け入れる玄関口、NY 市を気に掛ける教養人、すなわち建国以来の主流派であるワスプ（White Anglo-Saxon Protestant）に類する中産階級米国人が読者として想定される。1896 年 1 月の手紙で、Crane は独立宣言採択前後の時代に（建国の父祖が集う）大陸会議に植民地代表として招聘された同姓同名の先祖に言及し、建国の父祖に準じる出自を手紙の読み手に誇示する（Wertheim & Sorrentino, *Correspondence* 166）。とすれば、Mayo-Smith と同様、ワスプ的価値観を共有する中産階級米国人を読者と見て、移民の影響力、同時代の NY 市、の双方を意識しながら Crane は（手紙と同様に）作品を執筆したと推察される。[注3]

「宝石」を特集する著作が 1890 年に同市で刊行される。宝石は interest が含意する「興味」と「利益」の両面から眺められる。第「1」章は「ダイヤモンド」を取り上げる。この章立ては数多の宝石の中でダイヤモンドが持つ突出した知名度と重要度を示唆する（Kunz, *Gems* 8, 13）。同一著者が 1892 年、「模造宝石の検出」という記事を同市で発刊される雑誌に寄せる。宝石の真贋を「検出」する方法が激論される。「模造宝石」（artificial gems）の流通、それに対する早急な対策の必要性、及び注意喚起が窺える。中産階級米国人読者（と Crane）がこれらの著作・雑誌が発刊された同市と関連付けて、模造宝石（特にダイヤモンド）に不安交じりの関心の目を向けたことは想像に難くない（Kunz, “Detection” 276）。南アフリカに位置する英国領ケープ植民地内の「キンバリー鉱山」（the Kimberley mines）がダイヤモンドの代表的な供給先として挙げられる（Kunz, *Gems* 13）。同鉱山由来のダイヤモンドを米国が当時大量に購入している。実状を裏付けるかのように、同鉱山を模した展示に多数の万博来場者の足が止まる。南アフリカの一部族、「ズールー人」（Zulu）が作業に従事する「土を水で濾してダイヤモンドを選別する工程」（the process of diamond washing）の実演展示が人気を博す（Bancroft 499）。＜本物＞のダイヤモンドを希求する（中産階級米国人）来場者の心を掴む。その際、米国の文明の到達度を内外に示す万博の企図の下、アフリカ人（ズールー人）労働者を監督する（ケープ植民地を領有する）英国（人）の傍らに万

博の開催国（米国）を並置する優劣図が来場者に植え付けられる（Davis 308）。

これを踏まえて、万博会場の外に目を向ける。宝石を特集する著作が刊行された 1890 年、NY 市中のスラム街を取材したルポルタージュが同市で発刊される。スラム街で生活する下層労働者階級は多国籍の移民集団から成る。彼らは「シマウマの毛並み」（the skin of a zebra）の白黒の縞模様に見立てられる（Riis 25）。英米両国で刊行された 1895 年の英語辞書はアフリカ人を「黒い人種」（the black race of men）と定義する（Stormonth 651）。シマウマの比喩は、黒（いアフリカ人）を白（人移民）と同等視する当時のアフリカ（人）観を示唆する。同ルポルタージュは、“One may find for the asking an Italian, a German, a French, African, Spanish, Bohemian, Russian, Scandinavian, Jewish, and Chinese colony.”、とアフリカ人と他の白人移民を横並びに配置する（Riis, 21, 25）。また、「かつてのアフリカ」（the old Africa）という表現を用いて、流入する移民に押し出されて既存のアフリカ人住民が移動を余儀なくされた結果、同市のスラム街に遍くアフリカ（人）要素が拡散している現状、が示される（25）。移民集団はアフリカ（人）のイメージで語られもする。スラム街で生活する移民集団の文明の程度の低さは南アフリカの一部族「ホッテントット人」（Hottentots）に喩えられる（133）。訓育される必要性が叫ばれる。アフリカ（人）と紐付けられて、中産階級米国人から眺められる。1870 年代から 80 年代にかけて、米国人ジャーナリスト Henry Morton Stanley はアフリカを探検し、「最も突出した英雄」（most distinguished hero）と米国で絶賛される。1895 年、米国で発刊された雑誌上で、彼は Rhodes のアフリカ政策を高く評価する。同じ文脈で、文明化を目的としたアフリカの植民地支配が正当化される（Boyd 1；“Men and Women of the Hour”385）。アフリカ（人）の教育水準の低さを前提に、Rhodes を擁する英国と自国の文明を重ねて、中産階級米国人は優越意識に浸る。彼らのこの姿と移民に付与される一連のイメージは表裏一体を成す。

百貨店は、フランス語で「世界一」を意味する“Le Meilleur du Monde”を宣伝文句に中産階級米国人にダイヤモンドを販売する。また、NY 市に本店を構える宝飾店ティファニー社は、自社のダイヤモンドを「結婚（式）に相応しい贈答品」（Wedding Presents）と宣伝する（Diamond Jewelry；Wanamaker 127）。NY 市で 1893 年、既に 24 版を重ねる礼儀作法本の第「25」版が改訂増補の形で再刊される。副題で謳われる「何をいかにすべきか」（What to Do and How to Do It）の問いに対する場面ごとの＜模範解答＞を示すそのロングセラー本によると、中産階級米国人は「結婚（式）の規範」（Etiquette of Wedding）に倣うことが期待される。例えば、ダイヤモンドの適切な使用が結婚（式）において求められる（Houghton et al. 197）。ティファニー社は「（光り輝く）ダイヤモンド」（brilliant）を万博に出品する。それ（の輝き）は規範に適った米国（と同市）の文明の高さを象徴する（Bancroft 508）。1895 年の英語辞書は、diamond、splendid、sparkling、の三者を等価視する。sparkling と真逆の dark を「不道徳な」（vile）と定義する（Stormonth 113, 242）。splendid が導く「優越性」、（「道徳」によって裏打ちされた）高い文明水準、をダイヤモン

ドの「輝き」(sparkling) が表現する。付随する（結婚（式）に係る）礼儀作法、(フランス語の) 教養、(万博が標榜する) 文明性、と合わせて、ダイヤモンドは中産階級米国人にとって優越の印となる。

同じ文脈で、万博の実演展示でズールー人が担う監督される労働者の立場は理解できる。彼らの延長に、ホッテントット人と同等視され文明の程度の低さが強調される（NY 市中のスラム街の）移民（労働者）が見据えられる。(移民を多く含む) 労働者階級の生活水準が文明の質を映し出すという文脈で、「銀の自由な鋳造」(the free coinage of silver) を求める自由銀運動の是非、が米国で盛んに論議される（Mayo-Smith, "Free Silver" 464)。その背景には、米国の目下の不景気と金融混乱の原因を移民に求める見解があった。(アフリカ人と同様に) 文明的に劣る雑多な移民が米国の社会秩序を乱す。有効な金融施策を模索しつつ、「金本位」(gold standard) と「銀本位」(silver standard) の間で米国の貨幣経済は揺らぐ。第三軸として、「ダイヤモンド本位」(diamond standard) の導入が政策として検討される（Mayo-Smith, *Emigration* 166 ; White 86, 99, 156, 549)。[注4] 中産階級米国人は模造宝石（ダイヤモンド）に特別の注意を払う。その背後には、移民の台頭に対する彼らの警戒心が控える。米国の金融の中心 NY 市は、彼らの優越性を担保する金融制度の安定のための砦として期待される。一方、同市（のスラム街）は移民集団を次々と受け入れてアフリカ（人）との混住が進む。このように、中産階級米国人の優越意識と、ダイヤモンド、アフリカ（人)、移民、の三者は 1890 年代の米国（の同市）において交錯する。Crane（の作品）が現況を無視し得たとは考え辛い。実際、ダイヤモンド本位と銀本位の議論が高まる只中、1895 年の新聞記事 "Free Silver Down in Mexico" の中で、銀本位制度に立脚した、メキシコの「自由銀」を作家は取り上げる (8 : 444)。当時の社会文化的状況と作家はどのように関係していたのか。これまでの考察を踏まえて、1890 年代前半に発表された Crane の作品を時系列に沿って複数取り上げて、以下でそれを探求する。

2. Crane（の諸作品）とダイヤモンド、アフリカ（人)、移民、の関係性

ダイヤモンドが（直接間接を問わず）文明の程度を指し示す道具として用いられる。NY 市中のスラム街の風景を切り取る 1892 年の Crane のスケッチ "The Broken-Down Van" がその好例である。"A Chatham Square cab fought its way along with a man inside wearing a diamond like an arc-light."、とスラム街の風景を通り抜ける辻馬車の「乗客」がクローズアップされる。「アーク電灯」の輝きと「ダイヤモンド」が比喩形象の中で結び付く (8 : 278)。外光が反射して身体の一部が輝く状態を表してダイヤモンドを身に付けている、とする一次的な読み以外に、ダイヤモンドを身に付けた人物がスラム街で光り輝いてアーク電灯のように周囲を明るくする、と深読みもできる。彼の出自は不明で、ここにしか登場しない。彼に付帯する限定的な情報が却って際立つ。光

を当てられて暗所が明るくなり、事物がよく見えるようになる。（ドイツ人やユダヤ人）移民が生活を営むスラム街は元々「暗」い（8:275, 278）。彼らを電灯で照らす行為は啓蒙（教育）の身振りに合致する。同時代の広告は、“The Search Light Shows the Way”、と「道を示す」、「適切な方向に導く」装置として電灯を見る（Search Light）。匿名性と相俟って、文明の「光」（light）を照射して外界のスラム街を見渡す、部外者の優位な視線を備えた中産階級米国人の代表として、車上の観察者は位置付けられる。彼に付随する「アーク電灯」（arc-light）は、“the most brilliant artificial light”を発する、と喧伝される（*Brush Arc Lamp* 14）。brilliant を介した（アーク）電灯の「輝き」と「（光り輝く）ダイヤモンド」は結合する。1895 年の英語辞書の中のダイヤモンドに関する諸定義がなぞられる。ダイヤモンドと移民に相対する作家の立ち位置が明確になる（Stormonth 113）。

スケッチ発表の同年、（キンバリー鉱山から採れるダイヤモンドを独占し、英国の帝国主義政策を押し進め、アフリカ（人）を支配下に置いた）Rhodes の戯画が英国の雑誌に掲載される（“Rhodes Colossus”）。当時、（作家を含め）中産階級米国人はダイヤモンドの供給先としてキンバリー鉱山に強い関心を寄せていた。Rhodes の戯画もこの流れで直視されたと想像できる。万博で展示されるズールー人と 1885 年頃に撮影された 1 枚の写真は相似を成す。靴を履いて服を着た白人監督者の下、「上半身裸」で「裸足」のズールー人がダイヤモンド鉱山で働く様子が映される（*Zulu Workers*）。その写真の構図を踏襲するかのように、Rhodes はライフル銃を背負い軍服に身を包み（鉱山の白人監督者と同様に）靴を履いて屹立する。高みからアフリカを睥睨する彼の姿勢と目線は Rhodes と帝国主義（者）の文脈で英国（文明）の優越性を表徴する。戯画は、アフリカ（人）と対極にある英国（人）の根幹を成すアングロ＝サクソン人に起源を辿る中産階級米国人の目に、近しい人物のイメージを焼き付けたと推察できる（Radziwill 864）。これを手掛かりにして以下、作家がアフリカ、特にズールー人とホッテントット人を取り巻く状況、をどのように描出しているかを、先のスケッチにおけるダイヤモンド表象を踏まえつつ、文明の担い手（中産階級米国人）、対、移民、両者とダイヤモンドの関係性、から具体的に眺める。その際、作家の最初の署名入りの記事と短編、1890 年の“Henry M. Stanley”（以下、HMS と表記）、1891 年の“The King’s Favor”（以下、KF と表記）に着眼する（Sorrentino 64, 77）。両作品が「アフリカ（人）」を取り扱っている事実を単なる偶然と切り捨てることはできない。むしろ、アフリカ（人）への作家の関心の源泉を、作家の＜ブランド力＞と絡めて汲み取ることができると考える。

作家は当時在籍していた大学で出された授業課題を基に、米国人（アフリカ探検家）Stanley の業績をまとめて短い記事 HMS を仕上げる（Sorrentino 64）。この経緯によれば、作家が資料を参照せずに執筆したとは考え辛い。記事が発表される前年、1889 年に米国で Stanley を特集する著作が刊行される。腰蓑だけを纏い半裸で佇む黒人、ズールー人の姿が挿絵越しにアフリカ（人）を可視化し、ステレオタイプ化する。また、英国領ケープ植民地でのダイヤモンド発見（に沸

く興奮状態）はカリフォルニアのゴールドラッシュ（の熱気）に見立てられる。Stanley への関心は米国と陸続きのアフリカ（人）への関心にすり替わる。「野蛮人」（savages）の一員として括られる「黒」いアフリカ（人）、ズールー人の姿が際立つ（Boyd 417, 418, 419）。同著作が展開するアフリカ（人）イメージを準えるように、HMS は、“The people of every enlightened nation of the globe were troubled over his［Livingstone’s］fate.”、とアフリカで消息を絶った英国人 David Livingston の安否を懸念する際に people of every enlightened nation の側に自身を含めた米国人を置く（8:565）。彼らの正反対に位置する「適切に教育されておらず、文明化されていない人々」が、「アフリカの肌の黒い人種」（black race of men in Africa）、「（未開な）アフリカ人」（negroes）、と蔑まれる。彼らは「自治や自制」（self-government）の経験を持たない。彼らは支配下に置かれる必要があるとされる（Mayo-Smith, *Emigration* 64-65）。Livingstone は対照的に、「探検家」（explorer）と形容され、彼の功績は“his endeavor to christianize even the most remote tribes”と評価される（8:566;Stormonth 651）。一方、（宣教師でもあった）Livingstone は、「辺鄙な場所に棲む部族」（remote tribes）と表される非文明人としてのアフリカ人をキリスト教徒に仕立て上げる目的を有する。Livingstone と Stanley が共有する立場と価値観、それと接続するワスプ的思考、がアフリカ（人）に広く強制され、英米の下に従属させられる。“［Stanley］should ever rank not only as a great christian explorer, but as a great statesman［...］.”、と作家は Stanley（のアフリカ探検）をキリスト教信仰、政治手腕、と関連付けて賛美する（8:567）。ワスプを代表する彼の一連の（政治的）行為を肯定する。「（文明から）遠く隔たった」場所･存在とみなすアフリカ（人）観、（カリフォルニアの金脈と同様に）その独占権を（中産階級）米国人に認めるダイヤモンド観、に、中産階級米国人と同じ目線で、Stanley の探検行をなぞりながら、作家は深く同調する。

探検家側ではなくて（南）アフリカ（人）に焦点化する短編 KF が HMS を補完する。アフリカ（人）とダイヤモンドに対する作家の思考様式がより立体的に浮き彫りになる。米国人テナー歌手の「南アフリカ」での体験談を脚色し、ズールー人の王 Cetewayo が同短編の中心に据えられる（Wertheim & Sorrentino, *Crane Log* 51）。テナー歌手と王は、“the principal cities of the British colonies in South Africa”の内の 1 つで謁見する（8:570）。彼ら（の王）が英国に支配されている実態を British colonies は仄めかす。王は“furred backs of Africa”の一員で、“crowned head of Europe”と対置される（8:570）。（英国を代表とする）欧州を head、アフリカを back とする序列は、HMS に見られる英国（人）とアフリカ（人）の間の文明の程度の差異と連動する。このとき、（米国人）テナー歌手は英国側に立つ。英国（と米国）よりも下位にアフリカを置く優劣図が浮かび上がる。その中で、ズールー人の黒さは dark-skinned と表現される。dark は文明水準の低さを暗示する。彼らは「野蛮」（barbarism）と繋げて語られもする（8:570）。Stanley を特集する 1889 年の著作に付された挿絵に合致する（Boyd 418;Stormonth 113）。アフリカ（人）は未開故に、（英国を代表とする）欧州によって適切に教育されるべきとされる。HMS と見解を同じくする。

（テナー歌手を伴う）英国人一行には「ホッテントット人通訳」（a Hottentot interpreter）が付き従う。文明化されたアフリカ（人）の姿が認められる（8:571）。ホッテントット人は当時、文明の突出した低さで知られた。しかし、通訳として英国人とアフリカ人の間に立って双方の言語を翻訳する役割を担う。英語教育を受け、文明化されたアフリカ（人）のモデルとなる。一方、王は自ら語らない。文明を象徴する通訳によって彼の生のアフリカ（人）の声は封じられる。ズールー人は英国人に支配され、ダイヤモンド鉱山で労働を強いられる。彼らは決起して Cetewayo 王の下に集結する。1879 年、英国軍との間でズールー戦争が勃発する。ズールー人は英国に降伏する（岡倉 28-29）。KF はズールー戦争後の同王の姿を描く。1882 年、英国で刊行されたズールー人を特集する著作は、“The safety of the South African Colonies is menaced by this principle of concession to savages. History has proved it to be a mistake. A strong firm Government, under white magistrates, is what is wanted for Zululand, and desired by the Zulus themselves.”、と記す。英国によるズールー人支配、民族自治の声の剥奪、を正当化し、「野蛮人」の対極にある白人（英国人）の文明の高さを強調する（Ludlow 219）。KF はズールー人の歴史とこの言説に則る。テナー歌手は an American man と言い表される（8:572）。王の姿に代表されるズールー人の無力さ、啓蒙（教育）を通して英国人にとって有用で従順な「通訳」へ文明化・服従させられたホッテントット人の姿、をテナー歌手越しに（中産階級）米国人が遍く目撃する。

HMS と KF には書き手の名前が入る。Crane の＜作家＞としての出発点を成す。直接間接の違いはあっても、両作品が取り扱う（南）アフリカとズールー人には、下位化された（南）アフリカ（人）イメージが付随する。それが 1890 年代の米国を舞台にした、文明の優劣、ダイヤモンド、アフリカ（人）、移民、をめぐる議論を裏で支えて彼の作品を貫く、と捉える。その内実を探るために、中産階級米国人から羨望される成功者のモデル、富裕層を取り上げる彼の作品を一考する。

1894 年の短編“An Experiment in Luxury”は NY 市中で生活を営む富裕層の日常を覗き見る Crane の実体験に基づく（8:301）。スラム街で生活する貧しい移民集団とは真逆の生活実態が描かれる。「若者」（[t]he youth）と称される（作家に近しい）語り手は、“The youth felt that he, one of the outer barbarians, had been detected to be a barbarian by the guardian of the portal [...].”、と富裕層と比較した際、自らを「野蛮人」（barbarian[s]）と認識する（8:295）。ところが、“Presently he began to feel that he was a better man that many—entitled to a great pride.”、“He felt valuable. He was sage and important.”、と富裕層の生活を体験する過程で、better、valuable、important が暗示する優越意識を植え付けられる（8:297）。富（を持つ上位の階級）を優越と見る等式が示される。また、“Here was a savage, a barbarian, a spear woman of the Philistines, who fought battles to excel in what are thought to be the refined and worthy things in life; here was a type of Zulu chieftainess who scuffled and scrambled for place before the white altars of social excellence.”、と富裕層の女性の苦悩が説明される（8:299）。「野蛮人」（a savage, a barbarian）、「無教養人」（Philistines）が「ズールー人の女酋長」

（Zulu chieftainess）と結び付けて語られる。一連の言表を通して、（富裕層よりも経済力で遥かに劣り、中産階級米国人よりも貧しい）NY 市中のスラム街で生活する移民たちは＜文明的に劣る＞アフリカ（人）と同列に置かれる。その根幹にはズールー人が控える。

ズールー人、彼らが居住する（南）アフリカ、双方の歴史と不可分のダイヤモンドについて、“[their] ears displayed their diamonds instead of their diamonds displaying their ears”、と短編は 1 回だけではあるが言及する（8:300）。ダイヤモンドの方ではなくて、人間の方がダイヤモンドを飾り立てて輝かせることが強調される。これは同時代の礼儀作法本と密接に関係する。女性のドレスとダイヤモンドは適切に組み合わせられなければならない（Houghton et al. 19, 261, 262, 265, 266）。規範がダイヤモンドを＜輝か＞せて、所有者の優越性を担保する。故に、中産階級米国人はそれを無視できない。模造品の使用は禁忌とされる。世界一（の品質）と謳い、＜本物＞を提供する意図をもって適正価格で百貨店がダイヤモンドを提供する（Wanamaker 127）。価格設定を信頼して、中産階級米国人はダイヤモンドを＜本物＞と判断する。しかし、規範に基づく信頼を同市中の移民（の中に混在する）犯罪者が揺さぶる。Crane は新聞記事でダイヤモンドと結び付けてそれに言及している。

1894 年、ペンシルヴァニアの炭鉱を取材した記事“In the Depths of a Coal Mine”の中で、作家は炭鉱労働者たちを「NY 市中の浮浪児」（the New York gamins）に準える。同市のイメージで炭鉱（と労働者）は語られる（8:592）。その初稿は、“[The Polacs] looked like [...] thieves. We could catch glints of the eyes, cowering aspects of the heads that made one imagine a scene in a penitentiary for bandits, murderers, and cannibals.”、と「ポーランド人移民」（[t]he Polacs）を筆頭に（移民）炭鉱労働者を「泥棒」、「強盗」、「人殺し」と形容する。彼らは犯罪者視され、法に従わない社会規範の攪乱者・逸脱者として描かれる。移民を記述するこの部分は完成稿から削除されるが、この移民観の下、作家（と読者）は彼らを「炭鉱労働者」（miners）と一括りにして眺めていたことは間違いない（8:592, 593, 606）。実際、「ポーランド人移民」は米国の目下の「混乱」（disorder）の主因として槍玉に挙げられていた（Mayo-Smith, *Emigration* 166）。彼らが働く炭鉱の内部で、“Little points of coal caught the light and shone like diamonds.”、と明かりで照らされた「石炭」は「ダイヤモンド」のように輝く（8:594）。記事は（中産階級米国人が倣うべき）規範を脅かす＜犯罪者＞たちを発見する。彼らを（移民）炭鉱労働者の中に囲い込み、ダイヤモンドの比喩越しに、ダイヤモンド鉱山の労働者へ転じる。（移民）炭鉱労働者は、記事の前年の万博で実演展示されたズールー人と同じく、監督者の下に置かれて、主従の優劣図の中で下位化される。

以上、1890 年代前半の Crane の諸作品に現れるダイヤモンド、アフリカ（人）、移民、の関係性を作家と読者の間の共通理解と絡めて検討してきた。作家は中産階級米国人（読者）と不安交じりの関心を共有する。米国社会が直面する同時代的な問題に無関心ではない。これらを踏まえ、「ダイヤモンド」を作家が表題に冠する唯一の作品、DD がダイヤモンド、アフリカ（人）、移民、

とどのように関わったのかを追求する。ダイヤモンドを通して、それを取り巻くアフリカ（人）と移民が殊更に意識されたと理解して間違いない。では、その過程でどのような社会文化的なメッセージを作品は発し得たのか。それを以下で考究する。

3. “Diamonds and Diamonds”におけるダイヤモンド、アフリカ（人）、移民、の関係性

DD は作家の生前に日の目を見ない。執筆されたのは 1896 年から翌年にかけてと推定される（8:814）。1897 年 7 月、兄に宛てた手紙で作家は「南アフリカ」に言及するが、時期的に見れば DD は執筆が既に開始されていたと考える方が自然で、むしろ完成した後に手紙は書かれた可能性がより高い。1890 年代前半の Crane の諸作品に関するこれまでの考察を踏まえるならば、そこから窺える南アフリカへの作家の関心の比重は現地で進行中の対英戦争よりも、ダイヤモンドをめぐる「（南）アフリカ（人）」の境遇（の歴史）に傾いていたと見える。DD は「NY 市中のテンダーロイン地区を舞台にした小説」（fictional Tenderloin stories）の 1 つ、「詐欺の内幕」（an inside look at a confidence game）を描く逸話、と Crane 研究の中で位置付けがなされるが、それ以上の議論はされてこなかった（Holton 138-39）。以下、先行研究がほぼ皆無の本作品が主題とする（模造）ダイヤモンドに収斂する光（輝き）をめぐる諸言説を暴く。これまでの論議を踏まえて、中心人物 Jimmie が担う役割、彼が犯す詐欺行為の意味、本物と模造のダイヤモンドの行方、に着眼する。作家は移民に対する警戒心を（中産階級米国人）読者と共有する。それを作中で代弁した上で安全に封じ込める。そこに向かう作家の戦略を詳らかにし、作家（の作品）を再評価する。

“Jimmie the Mole derived his name from a certain way he would look at you when you lied to him.”、と冒頭部で Jimmie が唐突に紹介される。lied を伴い、彼と「嘘」（lie）が連結する。彼の通称 Jimmie the Mole は、彼の外見的特徴、「ほくろ」（mole）を際立たせる。それは、“When he was lying to you, he was a polished and courtly gentleman with no shadow of facial deformity about him.”、と追記される。地の文で、あたかもほくろと等価のように、彼は単に“the Mole”と反復的に表記される。また、顔に現れる「影」（shadow）と「畸形」（deformity）は、異常に肥大化したほくろのイメージと一緒に醸し出される＜黒色＞と彼を結び付ける（8:114, 116, 117）。（DD が書き上げられた後）1897 年 11 月に発表された、NY 市中の風物を描く短編“Yen-Hock Bill and His Sweetheart”は彼の正体を掴む手掛かりを提供している（Wertheim & Sorrentino, *Crane Log* 223）。端役として彼は再登場する。彼の「友人の友人」として、「詐欺師」（a confidence man）、兼「（黒人に扮した白人が行う寄席演芸）ミンストレルショーの一座」（minstrel troupe）の一員である Bill という人物が言及される（8:396）。これを踏まえて DD に戻る。“Jimmie had a Tenderloin voice. This means a tenor well-suited to the air [...]. Sometimes he went forth into the great wide-world

and made money with this voice.”、と彼はテナー歌手を生業とする（8:114）。このとき、「テンダーロイン地区」（Tenderloin）という地名が彼に付随する。同地区は、NY 市中の歓楽街の 1 つでスラム街の一画を成し、1890 年代には大量のアフリカ人（黒人）の人口を抱えていた（Burrows & Wallace 1112）。嘘、ほくろ、黒色、Bill との間に暗示される同列性、に注意したい。彼は同市中のスラム街と「黒（人）」の連想からアフリカ（人）の属性を帯びる。また、移民とアフリカ人を等価視する言説を考慮に入れるならば、アフリカ（人）イメージを兼ね備える移民に繋がる人物、嘘と詐欺の近接性から仄めかされる詐欺師、という彼の正体が現出する。

Jimmie のほくろ、あるいは顔に浮かぶ畸形の影は、彼が嘘を吐く際に消失する（8:114）。代わりに、“[Jimmie] was a polished and courtly gentleman [...].”、と「光沢」（polished）が含意する、外見が「洗練された」（polished）「紳士」（gentleman）、と彼は表される。反復的にこのように呼び表される（8:115, 117）。NY 市で発刊された 1894 年の辞書は、「洗練された人間」（Polished People）の項で、人間とダイヤモンドの相似性を、“A human ‘diamond in the rough’ is a most unattractive lout. If he is to be ever valued as his inherent qualities deserve, he must be polished by culture and good society.”、と解説する（*Dictionary of Scientific Illustrations* 274）。適切に研磨加工されたダイヤモンドが「文化、及び優れた社会によって磨かれた」（polished by culture and good society）人間に重なる。また、1895 年の英語辞書は、“every educated person above a labourer [...]”、と gentleman を定義する（Stormonth 396）。Jimmie は「労働者の上に立つ側の教養人」とみなされ得る。ダイヤモンド鉱山の監督者に連なる。アフリカ人（及びその中に一括して取り込まれた米国内の移民）を従属すべき「労働者」に見立てて下位化する図式から逸脱し、主体的に＜紳士＞然として「詐欺」（swindle）に手を染める（8:116）。

1895 年の英語辞書は、「模造」を意味する bogus は実在した「詐欺師」（swindler）の名前に由来する、と説明を加えている。一方で、bogus は spurious（その類語は「混ぜ物により堕落し汚染された」の意である adulterate[d]）を意味する（Stormonth 19, 100, 976）。「詐欺」行為は意味論の次元においても、体制派の中産階級米国人を脅かす。文明的に劣った移民たちが米国社会へ（とりわけ NY 港を経て）流入する。彼らの中に異端思想に染まった「煽動者」（agitators）が紛れ込む。「混乱」（disorder）が巻き起こる。移民による既存の体制の「堕落」と「汚染」に相通じる（Mayo-Smith, *Emigration* 88, 166）。国家が崩壊しかねない。同じ文脈で、移民が米国を模造（宝石）で汚染している、と名指しされる。英語辞書刊行の同年、「米国の犯罪者を列挙」する著作が NY 市で発刊される。「模造宝石」（bogus jewelry）の流通に一役買う人物、ポーランド人移民の「模造宝石詐欺師」（[a] bogus jewelry swindler）について取り上げられる（Byrnes 225-26）。当時、宝石から真っ先に連想されたのがダイヤモンドであったことは言うまでもない。また、ポーランド人移民は（Crane を含めた）中産階級米国人の間で、「犯罪」絡みで社会秩序を乱す元凶として識別されていた（8:606; Mayo-Smith, *Emigration* 157, 166）。彼らが関与する模造宝石詐欺事件は、「模

造」と「詐欺」の意味の互換性の下、社会混乱、及び派生する既成の体制の揺さ振りと結託する。詐欺の被害者（中産階級米国人）は結果的にドルを移民によって奪われる。1893 年に米国は不況に見舞われる。原因の 1 つとして、「移民による本国へのドル送金」に由来するドルの海外流出が挙げられる（“Finances” 516）。これは模造宝石による詐欺と＜中産階級米国人からドルを奪い取る＞点で象徴的に繋がる。Jimmie は当座の「金欠」（a financial famine）を乗り切る必要に迫られる。彼はドルを獲得（略奪）する目的で宝石（ダイヤモンド）詐欺を働く（8:114）。この相似の枠内に彼もまた位置する。

「紳士」然として近付き、本物の方のダイヤモンドを見せて、購入を持ち掛ける。模造品ではないと証明するために相手の眼前で宝石職人に鑑定させる。鑑定後、予め準備しておいた模造品を売り付ける。これが Jimmie の手口である（8:115-17）。詐欺の被害に匿名の「元市議」（ex-alderman）が遭う（8:115）。ダイヤモンドの真贋を鑑定する際、“[The Jeweler] was bored because he thought somebody was going to be swindled [...].”、と（米国の政治に携わってきた）「元市議」は匿名性と相俟って、記号 somebody で表される詐欺の一被害者として一般化される（8:116）。鑑定人が抱く「うんざり感」（bored）越しに、類似の詐欺事件の頻発、それに対する中産階級米国人の警戒心、が時代背景と対になって立ち現れる。関連して、作品は「モンタナ」（Montana）に 2 回言及する。詐欺行為の只中、ダイヤモンドの来歴が語られる。「モンタナ出身の牧場経営者」（a ranchman from Montana）が以前にそれを所有していた、とする（作り）話を Jimmie は披露する。ダイヤモンド購入に同意した直後、元市議は、“The Montana—”、とダッシュ付きでモンタナ以下が尻切れ、かつピリオド不在の科白を発する（8:116, 117）。直接的には、件のダイヤモンドの出所、モンタナに関する発話と受け取れる。しかし、具体的に明示されながら、その先が伏せられるこの地名の使用には＜別の意図＞が潜んでいると考えたい。それは、市場に当時出回った、モンタナで産出されるダイヤモンドに酷似した水晶の類、「1 カラットあたり 2 ドル」という安価な「モンタナダイヤモンド」、と関係するのではないか（Montana Diamonds）。物語の本筋と無関係のモンタナが（何か言いたそうで言い切れない心境を吐露する印である）「ダッシュ」（—）と一緒に用いられる箇所に改めて着目する。取引を詐欺と薄々感じながら逃れられない元市議に向けられる、他人事ではない中産階級米国人全体の同時代的な警戒心が透ける。その感情は、紳士の属性を備えた詐欺師 Jimmie の＜越境性＞を通して一層煽られる。モンタナダイヤモンドとダイヤモンドの間の価値の違いに相通じる、（本物と模造品のすり替え）詐欺の過程で、「価値」を表す worth が都合 4 回使用される（8:115-16）。売り手（Jimmie）と買い手（元市議）双方が意識する価値（あるいは交換の基準）の重要性がここで暗示される。ダイヤモンドの相場に適った適正な交換の価値基準（価値観）が「（金本位・銀本位を補う経済政策として見出される）ダイヤモンド本位」と連結した「（ダイヤモンドが持つ）優越性」の屋台骨となる。Jimmie の詐欺行為はそれを打ち崩す。彼の紳士性は、ダイヤモンドの価値に付随する規範に基づ

く中産階級米国人の自己像を内部から攪乱し、転覆させかねない。この脅威が同時にどのような形で封じ込められているかを次に検証する。

“Lie to Jimmie in those days and he would shrug down his shoulders and squint at you most horribly and steadfastly until you grew nervous, probably, and went away.”、と Jimmie は「斜視」を含意する squint を伴い相手を見る（8:114）。1892 年、ハンガリーの社会評論家が「退化」思想に関する著作を発表する。短編執筆の前年、1895 年には NY 市でその英語版が刊行される。同著作は、「斜視」を「退化」を表す身体的特徴の 1 つとして掲げる（Nordau 16-17）。中産階級米国人が、「斜視」と「畸形」に釣られて、退化した人間未満の動物的な存在として（外見的特徴を根拠に）Jimmie を同定したことは想像に難くない。確かに、彼の紳士属性には polished が伴う。嘘を吐くとき、彼のほくろが生み出す畸形に比される影は消える。代わって、「（瑕疵のない）光沢」（polished）がダイヤモンドに特徴的な美的外観の如く出現する（8:114）。しかし、虚言を弄して模造品を売り捌く彼の詐欺の手口に即すならば、ダイヤモンドの輝きを浴びて生じた＜光沢という隠れ蓑＞の下、彼のほくろ、影、畸形が視認されないだけ、とも解釈できる。彼が（本物の）ダイヤモンドを所有しない点にも気を付けたい。知人女性から詐欺行為の間だけ彼はそれを「借用」する。本来の所有者の名前 Flasher は「閃光」（flash）を暗示する（8:114）。彼女は 1892 年のスケッチで描かれる、アーク電灯の輝きに直結する「ダイヤモンドを身に付けた人物」に準じる（8:278）。中産階級米国人と同様に、光を発する、啓蒙（教育）の主体と彼女はみなされ得る。対して、Jimmie は光が当たらない暗がり、未開なアフリカ（人）、を想起させる「辺鄙なイーストサイド界隈」（a remote East-side street）に店舗を構える宝石商を模造品製作の依頼のために訪れる。ほくろ、影と相俟って、暗さと共鳴する彼の＜非文明性＞が強く暗示される（8:117-18）。彼は輝かない。輝いたとしても、それは上辺に過ぎない。模造ダイヤモンドは「紛い物」（fake）と作中で表される。「ダイヤモンド」の文言はどこにも存在しない。“The diamond sparkles.”の等式は成立しない。決して輝かない fake と彼の合致を露呈する（8:118）。Flasher は他方、名前以外の情報が伏せられる反面、「従順」（obedient）と反復強調される（8:115）。当時の礼儀作法本は、“Obedience to authority is one of the first laws of all government and social order.”、と「体制側への従順さ」（obedience to authority）を「社会秩序」（social order）維持の観点から中産階級米国人が守るべき事柄として掲げる（Houghton et al. 48）。（支配され服従するアフリカ人に重なる）従順な Flasher は、（体制側に帰属する）中産階級米国人の価値観に適う人物として造形される。ダイヤモンドの所有権は Jimmie に譲渡されることなく、相応しい人間がダイヤモンドを終始一貫して所有し続ける。

詐欺行為の過程で示される約 200 ドルとする鑑定結果は、（Flasher が所持する）＜本物＞のダイヤモンドの正当な価値・評価に等しい（8:116）。当時、ダイヤモンドの価格帯は 10 ドルから 500 ドルの間に設定された（Wanamaker 127）。ダイヤモンドの価値基準は適切に保たれる。詐欺の被害者は一般化され、元市議の属性は消える。政治家が騙される構図を作品は巧緻に隠蔽する。

かつ、被害者は「元」市議であり、現職ではない。現在進行中の米国の政治への影響は皆無であることが強調される。Jimmie は、（模造）ダイヤモンドと絡んで、NY 市のスラム街の住人－紳士、アフリカ（人）－移民、テナー歌手－詐欺師、と多層的かつ複雑に入り組んだ人物造形がなされる。中産階級米国人の警戒心が煽られる。作家は彼らの心情を十分に慮りつつ、複数の安全弁を脅威の元を封じ込める仕掛けとして、作品に投入する。加えて、作家は同時代の政治家たちについて最終段落で雑感的に綴る。“People will laugh and vote for you out of a sense of humor.”、と「ユーモアのセンス」（a sense of humor）の光る話題へ詐欺（の被害）は転じられる。被害者は却って票を得る、と作品は結ぶ（8:118）。Jimmie（と彼の詐欺の実績）は彼方へ追いやられ、もはや光は当てられない。騙された側が結局のところ当選して輝く図を DD は前面に押し出す。米国の政治（家）への言及はまた、Stanley がアフリカ探検の中で発揮する政治手腕とワスプ的価値観を思い起こさせつつ、短編執筆の翌年、1898 年に米国の雑誌に掲載される戯画を先取りする（8:567）。それは“Colossus of the Pacific”と題され、表面上は米国の帝国主義的な太平洋進出が描かれる。擬人化された米国政府（政治）、中産階級米国人の代弁者、ワスプ的価値観の具現者、である Uncle Sam がサンフランシスコからフィリピンまで一跨ぎして太平洋を誇らしげに見渡す（“Colossus of the Pacific”）。Uncle Sam は Rhodes と同じ構図（ポーズ）を取る。1892 年の Rhodes の戯画が下敷きにされる。両者に共通の表面的な帝国主義の身振りを超えて、小論で検証した、Rhodes が具象する英国の帝国主義政策、その過程におけるアフリカ（人）支配、ダイヤモンド支配、に伴う英国の優越性、を Uncle Sam の戯画は変奏する。それを米国は自家薬籠中の物とする。DD が焦点化し、（模造品の新たな作製を依頼する）中途で放棄される、詐欺師 Jimmie の物語の根幹を成す「詐欺の内幕」、その周囲に張りめぐらされた安全弁と米国社会に蔓延する詐欺事件、を通して作品が発するメッセージに直結する（Holton 138-39）。

お　わ　り　に

1890 年代に書かれ（発表され）た Crane の諸作品は、ダイヤモンド、アフリカ（人）、移民、と不可分の関係にある。DD が主題とする、（模造）ダイヤモンドを用いた詐欺行為は、移民を取り巻く米国の社会文化的状況、その先に見据えられるアフリカ（人）、ダイヤモンド、が相互に絡まった産物と受け止められ得る。生前発表される機会を逸したため、執筆時の時代背景から分断されて過小評価されてきたが、執筆時期が重なる、あるいは前後に書かれた作品に接続する、と捉える方がむしろ自然、かつ妥当である。作家は Rhodes に直接言及しない。しかしながら、小論で明らかにしてきたように、（南）アフリカ（人）へ向かう作家の視線は同時代の英国によるダイヤモンド事業と NY 市中の風景と激しく交差する。1897 年 7 月の作家の手紙から窺える、南アフリカに対する作家の関心が（同時期に書かれた）DD という短編の形を借りて噴出

する。米国が直面する、ダイヤモンド、アフリカ（人）、移民、の問題系と無関係ではない。それどころか、ボーア人と英国人の衝突の背後に横たわる（南）アフリカ（の歴史）、（ズールー人、ホッテントット人に代表される）アフリカ人、アフリカ人に分類される（オランダ系の）ボーア人、に同市中の現状を重ねる。そこから敷衍して 1890 年代の米国の原風景を作家が幻視したと考えても強ち的を外してはいない。

最初の署名入り作品、アフリカ（人）を主題にする 1890 年の HMS と 1891 年の KF を始点とし、1897 年の DD、その翌年の 1898 年の Uncle Sam の戯画を終点に据える縦線（時間軸）を引く。線上に、小論で取り上げた、作家（とその時代）のアフリカ（人）－移民観が埋め込まれた諸作品は並び立つ。「1890 年」には初版が、Uncle Sam の戯画が世に出た「1898 年」に再版が出る著作の中で、著者 Mayo-Smith は中産階級米国人の起源を「アングロ＝サクソン人」に辿り、移民を「余所者」視する（*Emigration* 4）。この姿勢が 1890 年代の米国社会を貫く。Uncle Sam は Rhodes と戯画上で一体化する。縦線と交差する横線を引く。横線の両端に（中産階級米国人の精神的な二面性を形作る）Rhodes から派生した英国的、Uncle Sam に結実する米国的な視点（思考様式）をそれぞれ配する。縦横の線を対角線に見立てる。1 つの図形が現出する（図 1）。

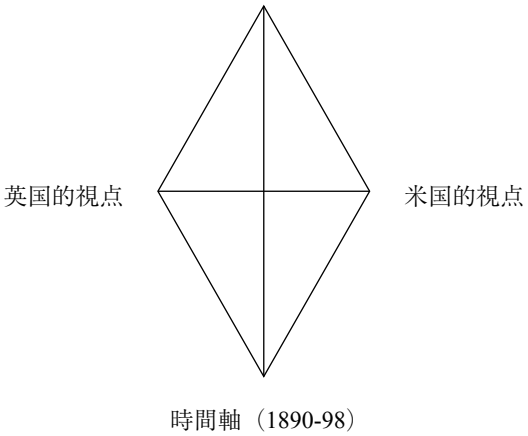

図 1

作家の（執筆活動と）作品はもう 1 つのダイヤモンド、すなわち「菱形」（rhombus）を象る。1895 年の英語辞書は、ダイヤモンドの八面体の結晶の形状を成す菱形を diamond の同意語として挙げる（Stormonth 265）。ダイヤモンド－菱形の思考様式を通して、ダイヤモンド、アフリカ（人）、移民、の三者をめぐる Crane の軌跡は、中産階級米国人と英国（人）の合一願望を引き摺りながら、ダイヤモンドによる移民の再封じ込めの力学を＜実体化＞する。

DD は一連の力学の要に位置付けられ得る。1898 年の戯画を用意する米国の時代精神の発露として理解できる。他方、その力学は「規範（手本）」（etiquette, manual）を示す礼儀作法本、及び

英文法・英作文指南書と結合する。規範は権威に通じる。教える（教わる）教育的ベクトルを通して浸透する。アフリカ（人）を代表するホッテントット人は通訳として、＜適切な英語＞、それに付随する英米寄りの価値観に基づく＜適切な礼儀作法＞を刷り込まれる。彼らの隷属状態をこの力学が裏打ちする。英国（人）と同化し、中産階級米国人はアフリカ（人）を支配下に置く。この自己イメージが反復的に再生産・再強化される。それは、Uncle Sam と Rhodes を重ねる図像学的戦略、万博閉幕後の新シカゴ市長と Rhodes を繋ぐイメージ戦略、と密に連動する。ダイヤモンド（を始めとする宝石類）に寄せる中産階級米国人の「関心」（interest）は、アフリカ人、ダイヤモンド鉱山の労働者、移民、の三者の同一視と下位化、自らの「利益」（interest）の維持と既存体制の堅持、と裏表を成す（Kunz, *Gems* 8）。この内奥に 1890 年代の米国の原風景の核が見て取られる。それに与する作家の姿が見出される。

NY 市で発刊された英文法・英作文指南書の中の「ダイヤモンド」を「輝く」と結び付ける例文は万博来場者が目にするティファニー社の「（光り輝く）ダイヤモンド」（brilliant）によって具現される（Bancroft 508）。同市で刊行される他の記事や辞書の中の記述、Crane が描く同市中の光景、を縁取る。同市を注視する中産階級米国人の価値観を擁護する、この原風景を語る上で欠かせない要素となる。複数の作品で作家は多種多様な宝石を比喩形象の中で反復使用する。これは印象主義的技法における色彩語として精緻に分析されている（押谷 212, 310, 358）。しかし、色彩語の用途を突き抜けて、（宝石の頂点に君臨する）ダイヤモンドの輝きの＜明部＞と＜暗部＞を作中で作家は＜効果的＞に活用している。作品においてダイヤモンドが果たす役割は分析と再評価に十分に耐え得る。書き上げられた（と推定される）1897 年の時点で DD が発表されなかった点が悔やまれる。欠落したパズルの断片が然るべき場所に嵌まり、他作品と結合することで 1890 年代の米国の原風景に添えられる輝き、作家（の作品）に対する批評の流れの変化と発展性、をめぐる想像は尽きない。[注5] 小論では複数の作品を特定の観点から論じる方法を取った。そのため、各作品を単体として深く掘り下げる作業が疎かになった感は否めない。しかし、他の Crane 作品と連続させて眺めることで初めて、些細な一詐欺事件の顛末を語る小品の枠に収まらない＜語（騙）りの広がりと奥行き＞が DD から浮かび上がる。自然主義文学という既成の枠に囚われない作家の姿とブランドがそこに見出される。

注

1　Crane の作品の引用は全て、ヴァージニア大学出版『Stephen Crane 全集（Fredson Bowers 編、全 10 巻）』による。巻数と頁数を括弧内に併記する。

2　筆者は 2016 年の論考で、アフリカ（人）に寄せる Crane の関心をツーリズムと絡めて論じている（増崎「『アフリカ』から読む」23-40）。小論は南アフリカ（人）に着眼して 1890 年代の米国社会の実相を探る。その際に、人種差別的意味合いを含む「ニグロ」（negro）、「黒人」（black）を歴史的な用語として用いる。

3　小論で取り扱う雑誌・著作等は全て、中産階級米国人読者の価値観を代弁していることを前提とする。

4　筆者は 2013 年の論考で、作家の代表作 *Red Badge of Courage*（1895）で使用される「金と銀」の色彩語に着目して、金本位と銀本位の間で揺れる米国の貨幣経済の変革と同作品の繋がりを指摘している（増崎「Henry Fleming は何者か？」21-33）。小論では、ダイヤモンドに向けられる関心の源泉を金（銀）本位の論議から派生したダイヤモンド本位と紐付けて考察する。

5　架空の田舎町を舞台に、アフリカ人（黒人）馬丁の処遇を主題にする中編“The Monster”を Crane は 1897 年に書き始める（Wertheim & Sorrentino, *Crane Log* 268）。馬丁の働き先である Trescott 家の一人息子、白人少年 Jim（彼の愛称が Jimmie）は作中で重要な役割を果たす（7:9）。アフリカ（人）へ寄せる作家の関心が窺える。加えて、Jimmie という名前の再利用は、作家が“Jimmie”を多面的かつ曖昧な人物として意識的に用いていた事実を示唆するとともに、DD と本作品を連続的に眺める視座を提供する。

引用文献

Bancroft, Hubert Howe. *The Book of the Fair : An Historical and Descriptive Presentation of the World's Science, Art, and Industry, as Viewed Through the Columbian Exposition at Chicago in 1893*. Vol. 1. NY : Bounty Books, 1894.

Bowers, Fredson, ed. *The University of Virginia Edition of the Works of Stephen Crane*. Charlottesville : UP of Virginia. 10 vols. 1969-76.

Boyd, James P. *Stanley in Africa : The Wonderful Discoveries and Thrilling Adventures of the Great African Explorer and Other Travelers, Pioneers and Missionaries*. Philadelphia : Stanley Publishing, 1889.

The Brush Arc Lamp. Cleveland : The F. W. Roberts Company, 1893.

Burrows, Edwin G. and Mike Wallace. *Gotham : A History of New York City to 1898*. Revised ed. NY : Oxford UP, 2000.

Byrnes, Thomas. *Professional Criminals of America*. New and Revised Edition. NY : Dillingham, 1895.

“Colossus of the Pacific.” Cartoon. *Chicago Tribune* 24（1898）.

Conklin, Benjamin. Y. *A Complete Graded Course in English Grammar and Composition*. NY : American Book Company, 1888.

Davis, George R. “The World's Columbian Exposition.” *North American Review* 154（1892）: 305-18.

Diamond Jewelry. Advertisement. *Illustrated American* 18（1895）: 547.

Dictionary of Scientific Illustrations and Symbols : Moral Truths Mirrored in Scientific Facts. NY : Wilbur B. Ketcham, 1894.

“Finances of the United States.” *Journal of the Royal Statistical Society* 56（1893）: 506-18.

Holton, Milne. *Cylinder of Vision : The Fiction and Journalistic Writings of Stephen Crane*. Baton Rouge : Louisiana State UP, 1972.

Houghton, Walter R., et al. *Rules of Etiquette and Home Culture ; or What to Do and How to Do It*. 25th ed. NY, 1893.

Kunz, George Frederick. “Detection of Artificial Gems.” *Science* 19（1892）: 276-77.

—. *Gems and Precious Stones of North America*. NY : The Scientific Publishing Company, 1890.

Ludlow, W. R. *Zululand and Cetewayo ; Containing an Account of Zulu Customs, Manners, and Habits, after a Short Residence in Their Kraals, with Portrait of Cetewayo, and 28 Illustrations from Original Drawings*. London : Simpkin, Marshall, and Co., 1882.

Mayo-Smith, Richmond. *Emigration and Immigration : A Study in Social Science*. 1890. NY : Scribner's, 1898.

—. “Free Silver and Wages.” *Political Science Quarterly* 11（1896）: 464-77.

“Men and Women of the Hour.” *Home and Country* 11（1895）: 383-95.

Montana Diamonds. Advertisement. *Railroad Trainmen's Journal* 11（1894）.

Nordau, Max. *Degeneration*. NY : Appleton, 1895.

Radziwill, Catherine. “Cecil Rhodes's Future.” *North American Review* 170（1900）: 857-70.

Riis, Jacob A. *How the Other Half Lives : A Study Among the Tenements of New York*. NY : Scribner's, 1890.
"The Rhodes Colossus Striding from Cape Town to Cairo." Cartoon. *Punch* 10（1892）.
Schlereth, Thomas J. *Victorian America : Transformations in Everyday Life, 1876-1915*. NY : HarperCollins, 1992.
The Search Light Shows the Way. Advertisement. *Illustrated American* 18（1895）: 127.
Sorrentino, Paul. *Stephen Crane : A Life of Fire*. Cambridge : Harvard UP, 2014.
Stead, William T. *If Christ Came to Chicago! : A Plea for the Union of All Who Love in the Service of All Who Suffer*. Chicago : Laird and Lee, 1894.
Stormonth, James. *A Dictionary of the English Language : Pronouncing, Etymological, and Explanatory*. New Edition. London and NY, 1895.
Wanamaker, John. *Catalogue No. 34 : Spring and Summer, 1893*. Philadelphia, 1893.
Ward, Harriet. *Jasper Lyle : A Tale of Kafirland*. London : Routledge, 1878.
Wertheim, Stanley, and Paul Sorrentino, eds. *The Correspondence of Stephen Crane*. NY : Columbia UP, 1988.
―. *The Crane Log : A Documentary Life of Stephen Crane, 1871-1900*. NY : G.K. Hall, 1994.
White, Trumbull, ed. *Silver and Gold or Both Sides of the Shield*. Washington : Publisher's Union, 1895.
Wilkins, W. H. "Immigration Troubles of the United States." *Nineteenth Century* 30（1891）: 583-95.
Zulu Workers at De Beers Diamond Mines, Kimberley, South Africa. Photograph. c. 1885.
岡倉登志『ボーア戦争―金とダイヤと帝国主義』　東京：教育社、1980。
押谷善一郎『スティーヴン・クレインの眼』　大阪：大阪教育図書、1995。
増崎恒「『アフリカ』から読む Stephen Crane―19 世紀末米国におけるツーリズム（リスト）とスラム街―」『追手門学院大学国際教養学部紀要』9（2016）: 23-40。
―「Henry Fleming は何者か？―Stephen Crane の *The Red Badge of Courage*（1895）を『ビジネス』という観点から再読する―」『追手門学院大学ベンチャービジネス・レビュー』5（2013）: 21-33。